

二〇〇三年度課程博士學位申請論文

概要書

指導教授 田中隆昭教授

題 目

奈良末・平安初期における漢籍受容の研究

—『日本靈異記』及び『成唯識論述記序釈』を中心として—

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻  
河野貴美子

本論は、和漢比較文学研究の新たな一天地を切り開くべく、中国古典学そのものの正確な認識のもとに、奈良末・平安初期における漢籍の受容について考察しようとするものである。具体的には、奈良末・平安初期に相前後して成立した薬師寺僧景戒撰『日本国現報善惡靈異記』と、興福寺僧善珠撰『成唯識論述記序釈』を取りあげる。

まず、『日本国現報善惡靈異記』（以下、『靈異記』）については、その所載説話の中に、中国仏教説話からの影響のみならず、志怪小説的記事などの非仏教的要素が存在することをめぐって検討を行う。『冥報記』等の中国仏教説話集や、『搜神記』等のいわゆる志怪小説所載の記事と『靈異記』説話が類同関係を持つことについては、既に先行研究に詳しい。しかし本論においては、個々の説話・記事との類似や、個別の著作との関係に止まらず、中国説話文学史の展開を鑑みつつ、それら漢籍の系譜を『靈異記』がいかに受け継ぎ成立したものであるかを、体系的に明らかにしていきたい。そこで本論はまず、『搜神記』という書物の、中国文学史における位置づけを見極めることから始める。それは、『靈異記』内に見える災異の予兆記事や神仙伝の記事といった仏教説話らしからぬ記事が、いずれもこの『搜神記』に特徴的に見えるものだからである。『搜神記』は本来、歴史の記録として編纂された六朝の学問の粹とも言えるべき著作であった。しかしその『搜神記』は、『法苑珠林』へ再録された段階を大きな機として、不思議を語る説話的側面が強調され、中国説話文学の開端としての役割が与えられるようになるのである。本論では、こうした中国志怪小説史、さらには中国説話文学史の展開の先に、仏教説話集『靈異記』における『搜神記』的要素の享受の問題を捉えていく（第一部）。

一方、善珠撰『成唯識論述記序釈』（以下、『序釈』）は、国語学や仏教史学などの立場からの考察は既に行われてきたものの、未解明な課題が多々残されている作品である。『序釈』は、反切・訓詁注記や、いわゆる外典の引用を豊富に含む。そこで本論では、『序釈』に見える漢籍の引用状況の考察・検討を通して、『序釈』が、奈良末・平安初期当時における中国文化受容の実態を解明しようとする際、注目すべき内容に満ちた存在であることを指摘していく。辞書・音義書類から経書にいたるまで、外典を含むさまざまな漢籍を駆使してなされる善珠の注釈は、当時の奈良寺院における漢籍の学問、漢文知識のあり方を今に伝える、恰好の著作である。また特に本論では、これまでの研究で扱われることのなかった『序釈』写本の調査によって得られた新たな成果をふまえ、『序釈』が、唐代文献そのものの復原をも可能にする重要な資料的価値を有することを明らかにしていく（第二部）。そして、版本及び写本調査の成果を整理し、『成唯識論述記序釈』校注稿を合わせ提出する（第三部）。

本論は、以上の三部構成とし、奈良末・平安初期における漢籍の受容について、新たなアプローチを試みるものである。

## 第一部 『日本靈異記』にみる漢籍の受容―中国説話文学の系譜から―

### 第一章 中国説話文学の系譜

本章では、『搜神記』を開端とする中国説話文学の系譜を明らかにし、その系譜の先に

『靈異記』の成立を捉えていく布石とする。

#### ＜第一節 『搜神記』の語る歴史―史書五行志との関係―＞

本節では、『搜神記』における「歴史を語る意識」に注目し、従来いわゆる志怪小説の代表とされてきた『搜神記』の編纂目的を改めて捉え直すため、『搜神記』と史書、中でも「五行志」との関係に焦点をあてて考察し、両者の密接な関係と共に、その差異を明らかにしていく。『搜神記』に採録された五行志的記事を検討するのは、東晋一流の歴史家であり、「易」にも長けた学識者であった編者干宝にとって、災異を解し、歴史を解き、それを現実にも照らし世のあり方を問う五行志的世界こそが、『搜神記』にふさわしい内容であったと考えられるからであり、五行志的記事を読み解くことによって、干宝が『搜神記』編纂に期した、その思想的基盤の特徴を浮き彫りにできると考えらるためである。『搜神記』は、『漢書』以来の五行志的世界を濃厚に受け継ぎながら、同時に独自の災異理論を展開する。また『搜神記』は、後世の史書へも大きな影響を与えていることなどから、『搜神記』が他でもなく「歴史の記録」として中国文学史上に登場した著作であることを見る。（二松学舎大学大学院文学研究科紀要『二松』十六、二〇〇二年三月掲載論文『搜神記』の語る歴史―史書五行志との関係―」に基づく。）

#### ＜第二節 『搜神記』所収の再生記事に関する考察―五行志的記事の展開と変容―＞

本節は、『搜神記』所収の「再生」記事の考察を通じ、史書「五行志」との共通事項を多く有する『搜神記』の特徴について前節に続き検討し、本来『隋書』経籍志等の「史部雑伝類」に分類されていた『搜神記』が、何故後世において志怪小説の代表とされていくのか、その所以を明らかにする。

『搜神記』所収の再生記事には、『漢書』、『統漢書』五行志との類話を『搜神記』が独自に改変しているものがあり、また、干宝の時代の五行志的記事を『宋書』、『晋書』五行志が干宝『搜神記』から取り入れているものがある。『搜神記』の記事は、史書五行志の世界と深く関わるものであるが、同時にそれらの記事には、『搜神記』が、史書五行志の共通記事に比べ、複雑に展開する物語りの要素を含むことも見て取ることができる。そしてこうした『搜神記』の記事を、六朝の史家による史書の注釈、すなわち『統漢書』劉昭注や『三國志』裴松之注は歴史の異聞としてしばしば活用しているのである。干宝は『搜神記』序文で、歴史には異聞が付き物であるが、その異聞も含め記すことよって「神道」の誣ならざることとを明らかにするのだと編纂目的を述べる。『搜神記』という書名は、「神」つまりこの世の原理を「搜」し究める「記」ということである。死や再生に関する記事は、まさに干宝が書名に掲げた「搜神」の意図に沿うものとして『搜神記』に取り込まれたのだと考えられる。

ところが、これらの記事は後世の史書注には史実として引用される一方、『法苑珠林』には仏教例証話として引用される。そこには、本来易や五行災異思想に基づくものであった『搜神記』の記事が、説話的なものへと変容していく過程が見て取れ、『搜神記』が中国文学史上重要な転換点にあることがわかる。そして、この流れにおいて『搜神記』は中国小説の開端としての位置付けを与えられることになったのである。（日本中国学会『日本中国学会報』五十四、二〇〇二年十月掲載論文『搜神記』所収の再生記事に関する考

察―五行志的記事の展開を要容―」に基づく。）

## 第二章 『日本霊異記』にみる漢籍の受容と消化

仏教喧伝を目指すはずの『霊異記』が、仏教の枠を超えた神仙思想、陰陽五行思想を反映する記事や、いわゆる志怪小説的な志向を内在しつつ成立し得ているのは何故か。本章では、中国説話文学の承譜をふまえつつ、漢籍の受容と消化という観点からこの問題に迫る。

### 〈第一節 『日本霊異記』の編纂と『搜神記』・『法苑珠林』〉

本節は、第二節から第四節で述べる各論の総論として、仏教説話集『霊異記』に、仏教以外の思想・志向に基づく説話・記述が見えることについて、中国説話の原点的存在である『搜神記』<sup>1</sup>、そしてその『搜神記』の記事を多数引用し仏教世界を説く『法苑珠林』<sup>2</sup>に特に注目し、『霊異記』説話の形成、そして『霊異記』という仏教説話集編纂の営みについて考えていく。

『霊異記』説話には、雷捕獲や鬼退治といったいわゆる志怪小説的記事、災異の予兆を知らせる歌謡など史書五行志的記事、また神仙的人物の飛天を語る神仙伝的記事など、いずれも『搜神記』の特徴を典型的に示す記事と重なる内容が含まれている。そして、本来歴史の記録として集められた『搜神記』所載のこれらの記事は、中国においてやがて不思議を語る説話の側面が強調され取りあげられていき、『法苑珠林』に至っては仏教世界を説くために利用されていく。こうした中国説話文学の流れを見ると、仏教を喧伝する目的をもって編まれたはずの『霊異記』が、かくも非仏教的な要素を抱えながらも存在していることは、この『霊異記』の姿にこそ、中国における仏教説話形成の過程が映し出され、その系譜の先に『霊異記』が成立した実状が反映されているのではないかと考えられるのである。（和漢比較文学会『和漢比較文学』二十九、二〇〇二年八月掲載論文「仏教」『日本霊異記』にみる漢籍の受容と消化」に基づく。）

### 〈第二節 雷捕獲・鬼退治〉

第二節から第四節までは、『霊異記』説話に見える、いわゆる志怪小説的要素について、『搜神記』<sup>3</sup>、そして『法苑珠林』との関係に特に注目し、個別に考察していく。本節では、『搜神記』と『霊異記』との類話のうち、特に『霊異記』上巻第三縁の雷捕獲、鬼退治説話を取りあげ考察する。まず、『搜神記』所載の類話が、単に怪異を興味本位に集めたものではなく、歴史の記録から「神」を「搜」し究めようとした学究的態度によるものであることを確認した上で、その『搜神記』の記事を仏教例証話として多数引く『法苑珠林』の存在に注目し、『搜神記』の世界を仏教説話集『霊異記』に繋ぐ媒介としての役割を『法苑珠林』が果たした可能性を提示する。（田中隆昭編『交錯する古代』勉強出版、二〇〇三年刊行予定掲載論文『『搜神記』と『日本霊異記』の類話をめぐる考察―『法苑珠林』を媒介とした撰取の可能性―」に基づく。）

### 〈第三節 予兆歌謡〉

本節は、『靈異記』編者景戒が外典を含む漢籍に関心をもち、吉凶・予兆にも言及していることに注目し、特に下巻第三十八縁の予兆歌謡の存在を、中国史書五行志、そして史書五行志との共通記事を多く有する『搜神記』との関係から考察する。また、『搜神記』『冥祥記』『冥報記』と連なる中国史部雜伝類の系譜を確認すると共に、それら史部雜伝類の著作の記事を利用して仏教世界を体系的に構築する『法苑珠林』の編纂方法を確認し、こうした『法苑珠林』の方法を受け継いだことよって、『靈異記』は、仏法靈験以外の予兆歌謡や災異記事を含みつつも仏教説話集の体裁を持ち得ているのではないかと考える。〔説話文学会『説話文学研究』三十七、二〇〇二年六月掲載論文『日本靈異記』の予兆歌謡をめぐって―史書五行志・『搜神記』・『法苑珠林』との関係―』に基づく。〕

#### 〈第四節 神仙伝の記事〉

仏教説話集『靈異記』に神仙思想に基づく記事が含まれることについて、同じく仏教世界を説く中で神仙伝の記事をも引用する『法苑珠林』に注目し、『法苑珠林』が非仏教記事を引き場合、特に『搜神記』を重視し利用していることを見る。そして、仏教例証話として『搜神記』の記事を引用する『法苑珠林』感応縁の構築方法は、本来歴史の記録であった『搜神記』の記事が、不思議を語る説話の記事へと変容させられていく、まさに中国説話、中国仏教説話の展開過程を反映するものであること、そして、『靈異記』が、非仏教の記事を取り込みつつ編纂されたのは、『法苑珠林』を抛り所とし、その方法に倣ったためではないか、と考察した。（和漢比較文学会編『新世紀の日中文学関係―その回顧と展望』勉誠出版、二〇〇三年八月掲載論文『日本靈異記』の編纂と『搜神記』・『法苑珠林』―神仙伝の記事の存在をめぐって―』に基づく。）

### 第二部 善珠撰述仏典注釈書にみる漢籍の受容

#### 第一章 善珠の学問と『成唯識論述記序釈』

『靈異記』と『搜神記』との関係を考える際、『靈異記』卷末最終話に登場する興福寺僧善珠の著作『因明論疏明灯抄』に、『搜神記』佚文が引用されていることは、注目すべき点であつた。そして、これまでは未開拓な課題が多く残されたままであつた善珠の仏典注釈書を実際にひもといていくと、そこには、『靈異記』当時、すなわち、奈良末・平安初期の奈良寺院における漢籍、そして中国の学術・文化の受容の水準を直接に反映する興味深い記述が数多く存在していた。第二部、及び第三部では、その善珠の著作のうち、漢籍の引用をとりわけ豊富に見せる『成唯識論述記序釈』を考察対象とする。本章ではまず、『序釈』の具体的内容の考察に先立ち、善珠の学問と著作、『成唯識論述記』注釈の足跡、『序釈』諸本調査の結果について、整理する。

#### 〈第二節 善珠とその学問〉

『序釈』を始め、多くの著述を残した興福寺僧善珠について、現存する資料に残る、『序釈』の学問の実際を辿るとともに、『序釈』を中心として、善珠が残した業績、著述の基本事項を確認する。正倉院文書に残る善珠の自筆書状は、善珠の実際の学問状況を伝える資料

であり、中でも元康の『肇論疏』を善珠が借り受けている事実は、その『肇論疏』さながらの中国の義疏の形式をそのまま受け継いで善珠が著述を行っていることから、注目に値する。また、善珠の識語が付された中国法相宗の先徳の伝の存在は、興福寺において入唐僧玄昉を師とし、当代を代表する学僧として、中国の唯識・法相に関わる最新情報を撰取吸収していた善珠の姿を窺わせる。

## 〈第二節 『成唯識論述記』注釈の足跡―善珠を中心に―〉

本節では、『成唯識論述記』成立後、『序釈』に至るまでの『成唯識論述記』注釈に関する中国、朝鮮の足跡を踏まえ、また、『序釈』成立前後、及び、後世（特に江戸期）における『成唯識論述記』注釈の展開を辿り、『序釈』が法相・唯識学の系譜の中に占める位置と役割を確認する。特に今回、『序釈』を機軸として、江戸期の注釈書までをまとめ通観したことにより、『成唯識論述記』序文に対する注釈の歴史において、成立以後千余年に亘って『序釈』が一貫して優位を保ち、範として継承されてきたことも新たに確認できた。

## 〈第三節 『成唯識論述記序釈』諸本について〉

本論は、『序釈』研究において従来取りあげられることのなかった、元禄八年版本、及び伝存する三種の写本調査によって得られた成果に基づく部分が大きい。本節では、このたび調査した①東大寺図書館蔵元禄八年版本『序釈』、②東大寺図書館蔵写本『序釈』、③大谷大学図書館蔵写本『序釈』（餘大三八七二）、④大谷大学図書館蔵写本『序釈』（餘大三八一）の各テキストについて書誌的情報をまとめ、『序釈』諸本の状況を整理する。中でも、版本『序釈』の題辭、刊記などから窺える江戸期の出版界の状況は、版本の成立背景を今に伝える有効な情報となる。また、東大寺図書館蔵写本『序釈』の奥書は、当該写本が興福寺法相宗の中心を担った学僧らに受け継がれたものであることを示す注目すべき資料であり、これら写本の伝来状況についても、整理し述べる。

## 第二章 『成唯識論述記序釈』における漢籍の引用

本章では、『序釈』における漢籍の引用部分を具体的に取りあげ、善珠が、どのような漢籍をいかに用いているかを明らかにしていく。また、このたび、従来の先行研究では用いられることのなかった写本『序釈』を調査し、『序釈』が有する資料的価値が改めて見出された。そうした『序釈』の意義も十分に踏まえつつ、奈良末・平安初期の漢籍受容の実際を見ていく。

## 〈第一節 唐代文献の復原〉

本節では、『序釈』における『論語』堯日篇「苞氏注」、及び『広雅』引用部分を取りあげる。『論語』及び『広雅』の引用部分は、それぞれ現行の『論語』及び『広雅』テキストとは異なった本文を伝えており、それらは、夙に失われてしまった『論語』や『広雅』本来の本文を残すものである可能性が考えられる。本節では、これらの例を通して、『序釈』が、現在では失われていたり、また確認が困難となっている唐代文献の復原を可能と

する資料的価値を残すとともに、当時の日本にどのような漢籍が伝わり用いられていたかを知らせる証拠となることを見る。そして、『序釈』が、三国から隋唐にかけての経典解釈の問題につながるという点でも重要な意味を持った資料であることを指摘していく。

#### ＜第二節 仏の生滅年代及び後漢明帝の求法伝説について＞

本節ではまず、『左氏伝』の引用部分を取りあげる。この部分は、写本『序釈』の調査によって、『序釈』が、今では失われてしまった、本来あるべき『左氏伝』の本文を伝える、貴重な記述を持つことが判明した箇所である。また、写本『序釈』の本文によって、『序釈』の『左氏伝』引用部分が杜預の注に大きく依拠するものであることも新たに確認できた。さらに、当該部分は、『左氏伝』及び杜預注のみならず、『文選』頭陀寺碑文とその李善注なども合わせて編集された、善珠独自の注釈文となっていることも注目に値する。本節では、『序釈』が備える資料的価値を明らかにすると共に、さまざまな漢籍を駆使して行われている善珠の著述活動の実際に迫る。

また、本節後半では、『序釈』が、仏の生滅年代や後漢明帝の求法伝説に関して、『周書異記』や『漢法内伝』を並べ引くことについて、隋末当初の護法論者の著作との関係を検討に入れ、考察する。

#### ＜第三節 『文選』の引用＞

『序釈』が漢籍から引用する文の中には、現在のテキストが伝える本文と異同を持つものがままある。そしてその中には、それら『序釈』の引用文が、『文選』李善注引の文との間にのみ一致を見せる場合がある。同時期の仏典注釈書との比較においても、『文選』や李善注の利用は、善珠『序釈』の一特徴として指摘しうる。本節では、善珠が、『老子』『莊子』『礼』を出典として引用する注文が、それぞれ『文選』李善注を利用したものであることを明らかにし、善珠の著作において『文選』及び李善注が大きな役割を果たしていることを考察する。

#### ＜第四節 『成唯識論述記序釈』に現れた反切の特色＞

本節では、『序釈』所載の反切について、それらが依拠した典籍を検討する。特に、写本『序釈』の調査によって、『序釈』の反切注記部分において、版本と異なる、より古態を残すと思われるものが多数発見されたことは、従来の研究をさらに進展させる画期的なものである。本節では、写本『序釈』の調査から得た新たな知見をもとに、『序釈』所載の反切・訓詁と原本系『玉篇』との密接なつながりを指摘していく。また、原本系『玉篇』以外の音義書類との一致も含め、『序釈』所載の反切の特色を整理し、述べる。

(なお、第二部のうち、第一章第一節(二)『広雅』の引用・第二章第三節(二)『靈台』の注釈・『莊子』司馬彪注の引用・早稲田大学国文学会『国文学研究』一三九、二〇〇三年三月掲載論文「奈良末・平安初期における唐代文化受容の水準」『成唯識論述記序釈』を通して)、第二章第三節(二)「理洞希夷」の注釈・『老子』王弼注の引用・「は中国・東北師範大学『日本学論壇』二〇〇二年三―四期掲載論文「奈良時代の仏典注釈書の方法」『成唯識論述記序釈』と『肇論』『肇論疏』及び『文選』李善注・、第一章第一節(一)『論語』及び苞氏注の引用・第二章第二節(一)『左氏伝』の引用・

仏の誕生年代について―は中古文学会『中古文学』七十一、二〇〇三年五月掲載論文「善珠撰述仏典注釈書における漢籍の引用―『成唯識論述記序釈』をめぐる一考察―」に基づく。

### 第三部 『成唯識論述記序釈』校注稿

元禄八年版本『成唯識論述記序釈』を底本とし、東大寺図書館蔵写本、大谷大学図書館蔵写本二種と校合し、校本『序釈』を提示するとともに、反切・訓詁注記を中心に、その注文について、注釈を付す。

本論は、『靈異記』論、あるいは和漢比較文学論としては、その一部を論じたものに過ぎない。しかし、研究の対象・領域を「中国学」そのものへも広げた上での比較研究を目指す。指した今回の取り組みを通じ、この先に切り開かれていくべき日本文学の比較文化史的研究の新たな可能性につながる端緒を得たようにも思う。例えば、『法苑珠林』が構築する仏教世界のさらなる解明など、中国及び日本説話文学史のいっそうの探究、また、『成唯識論述記』や『序釈』の教義面からの内容解釈や、善珠の著作のみならず同時期に成立した他の仏典注釈書類への取り組みなど、さらに幅広くかつ多角的な研究へと展開していきたい。